

～すべてはこの言葉のために～

B a n d e 代 表 野 口 桂 佑 インタビュー

「人間力を求めて…」

ゴールキーパーとは・・・人間力そのものである。Bande 代表の野口さんの表現だ。
この言葉に、野口さんが何を目指しているのかが映し出されている。

Bande GK School から Bande GK Academy への新しい門出に当たって、代表の野口さん取材した。
ここでは、野口さんの“人間力育成”への熱い気持ちとチャレンジ精神を感じ取ることができた。彼が創造
するであろうゴールキーパーの輝かしい未来に目が離せない。

あこがれは選手でなく指導者なんです。

——指導者の道を選んだ理由を教えてください。

野口 僕は、選手というよりもコーチに憧れていたんです。なぜか考えると、僕はコーチにずっと恵まれていたから。

小学校の時の藤原先生が大卒バリバリで、サッカーの楽しさを教えてもらった。「すげえ、うまい、かつこいい」という感じ。勝つためのサッカーというよりも、「楽しいよ、サッカーは」というのを教えてくれた。みんな仲良かったし、みんなサッカー好きだったし、みんな藤原先生が好きだった。根本的に指導者に思い入れがあるのはそこがあるからかな。

中学校では、掛川 JFC というクラブチームでサッカーをやった時の大場コーチ（ジュビロ磐田サテライトチームのキャプテン経験者でゴン中山の同世代）もサッカーは楽しいということを教えてくれた。もちろん人間力も成長させてもらったし、ジュビロのトレーニングや、ジュビロユースのセレクションにも推薦してくれたり、たくさんの経験をさせていただくなど、そういう部分でも恵まれていた。だからこそ、今の Bande の選手にもたくさんの経験をさせてあげたいです。

——身近な人に恵まれていたのですか？

野口 たぶんそうだと思います。母親にも、「あんた、やっぱりいいコーチに恵まれていたからコーチに

なりたかったんじゃない？」と言われました。

ルーツ

—ところでサッカーを始めた理由は？

野口 僕の場合は、野球よりサッカーが小2から始められて早かったから。野球は3年生からしか入れなくて、サッカーは2年生から入ることができた。親は野球をやっていたから、野球をやらせたかったようですが。

—じゃあ、野球が2年生からでサッカーが3年生からだったら？

野口 野球をやっていて、サッカーはやってなかったでしょう。

同級生の長谷川君に「桂ちゃん、サッカーやろうよ」と誘われて、2年生からやれるし、親は運動させたかったから。2年生でサッカーをやって、3年生になった時に野球をやるか決めればいいじゃんということから始めて、3年生の時点ではサッカーが好きだったということ。

自分の意志で何かをしたいというのはないんだなあ。キーパーもサッカーも（笑）

—野口さんは特に静岡だから（土地柄）ということではないんですか？

野口 いや、長谷川君に誘われたからです（笑）。サッカーに全く興味なかったし、サッカーという種目自体知らなかった。92年に始めたので、93年に開幕したJリーグもまだ無かった。だからJリーグが始まったからサッカーをやったということでもない。

—長谷川君、大きな役割を演じてくれたのですね（笑）。彼がいなかったら野口さんはここにはいなかったということですからね。

—ところで、あこがれの選手は？

野口 いませんでした。今でこそ見ているけれど、当時は全然サッカー選手を知らなかった。見ておけばよかった。

—では、好きな選手は？

野口 えー、いないです。王道のキーパーかな？オリバー・カーン、ファン・デル・サールとか、いいとは思いますがこれといってこの人というのはいないです。

強いてあげれば、川島世代、川口世代というのくらいじゃないかな。自分は川口世代だけれど、だからといって川口が絶対好きという風にはならなかった。

—以外とそういうものなんですかね？

野口 そういう意味でいえば、カズが好きとかそういうのはありますけど、プロフェッショナルなところが。

—カズが好きっていうのは選手としてですか？人間として？

野口 生き方ですかね。人間的に素晴らしい人だから、最近では指導者の目線で見ているから余計にそうであって、あの年齢であれだけ動いているなんてすごいな、って分かるんだけど。

——カズ選手は別格ですからね。

ゴールキーパーになったわけ、それは・・・

野口 小2でサッカーを初めて、当時は対外試合が無くて、練習だけを2年間やっていた。

4年生の時に初めて試合があって、ポジションとかも全員決まっていなくて、初めてやった試合で、藤原コーチが「好きなところでいいからやりたいところ手を上げて」と言った。

なぜか「キーパー」、と言った時に手を上げていた。なんで手を上げたかは覚えていない。なんでキーパーが良かったかも覚えていない。

——とにかく一番先に手を上げたい人だったんですね（笑）

野口 その時たまたま2人が手を上げて、ジャンケンで決めて負けたので、後半から出ることになった。前半ぼろぼろにやられて、後半は相手にも疲れが出ていた。そこで自分がキーパーをやった後半は、たまたま0点で抑えた。もう一人の友達は入れられたからもうやりたくない。自分は守れてたから「いいよ」と思ってそこから続けてました。

小6、中1の段階で身長が165cmくらいあり大きかったんです。今でこそ「小柄だね」と言われるが。。でもキーパーをやって後悔はない。キーパーだからこそ、ここまでサッカーに携わっていただろうし、キーパーじゃなかったら辞めていたかなとも思う。

——キーパーは疲れませんか？ 練習でも走らない？

野口 練習は疲れる。試合が楽で練習がきついのがキーパー。練習が楽で試合がきついのはフィールド。対照的ですね（笑）

——キーパーは、チームでレギュラー1人というパターンになると思うが、レギュラー争いにどういう気持ちで臨んできたか？ そして出られない時の気持ちは？

野口 出てる時期と出ない時期を経験してきた。なかでも出ない時期が大事だと思う。

出てる時に意識するのは、おまえだったら出られて当たり前前だよな、と言われるような練習（態度）を普段からしていること。お前だったら出てるの分かるよ、と納得してもらえること。

出ない時は、出ている選手が気持ちよく望めるように意識していた。ライバルではあるが、調子の良い、あるいは普段からやっている人間が出るのが当たり前。そこで負けてる自分がいるのに言い訳をする人間ではいけないと思う。

——スクール生には、たった1人のポジションに対してどのような気構えが大事と指導するのか？

野口 試合の結果で一喜一憂してはいけない、今出られなくても、相手を認め、その上で自分の足りない

ところを一所懸命トレーニングし、未来を見据えた気持ちで取り組む姿勢が大事だと言っている。

——いまだけではないという指導をしているということですね、なるほど。

「埼玉初」のキーパー専門スクールに。

——また少しフィードバックして、Bande を始めた動機は？

野口 サッカースクールを6年くらいやっていて、26歳で肩書はバイトしているだけのコーチだった。そろそろ社会的にやばいよなということと、所属していたスクールの人数が減ってきていたのに打開策を出していかなかったそのスクールに付いていけなかった。

埼玉県のゴールキーパートレセンに携わらせてもらって、その時の人たちが熱い人たちだった。キーパーをどうしよう、ああしようと考えていた。そういう熱い人たちと関わるのか、衰退していく人たちと関わるのか？ だったら、熱い人たちと関わりたいと思った。

名の知れないコーチが普通のスクールやってもたかが知れている。キーパーやっていたから、キーパースクールに特化しようと思った。

やるなら今やらないと、「埼玉初」という称号が得られない。「埼玉初」を名乗れるのは初の人だけ。プロが僕の後始めても、僕の方が初だから。

——Bande の対象の年齢は？

野口 小中学生ですが、ゆくゆく、5年後には高校生もやりたい。まだまだ高校も育成が上手く出来ていないので。だったら小中高一貫でやっていきたいな、と。

——小学生はキーパーを適当に決めて適当に練習していることが多いように思うが？

野口 そうです、適当に決めて、練習もお父さんがボールを投げて、という感じ。だからこそ、キーパーコーチというのにはニーズがあり、ニーズがあるからやる。

フィールド指導者の方のキーパーへの認知を高めていきたいと思っている。

「スクール」から「アカデミー」へ ～込められた思い～

——今回BandeをSchoolからAcademyに変えた理由は？

野口 大きく変えるのにはいろいろな理由があり、柱が5つ6つあるんですが、その中のひとつとしては、在籍している選手たちのスクールに対しての優先順位を高めたかったから。

それに、ここまで本気で変えようかなと思ったのも、一緒にやってくれるコーチが入ってきてくれたことで、僕自身にひとつ大きな支えができた。一人でやってきた時よりも一緒にやっていくとなった時に、この波に乗っていくべきだという思いが湧いてきた。

僕からしてみたら、この Bande に Jリーグの組織に在籍していた選手が来てくれている環境とか、いろんな指導者の方が指導に来てくれているということとか、普通でないスクールになってきている思いがあるんです。でも、それがいまいち生徒たちに伝わっていないかな、と感じていました。親御さんたちにも、同じようにです。

スクールというイメージだと、ただの習い事の延長線上みたいになっているんじゃないか？というところから、もっと特化してやっていく。本気でそこ(プロ)になりたいから学んでいるんだよ、と。

それこそフィギアスケートって、やるからにはプロだよって直結しているじゃないですか。趣味でやっているんじゃないくて、本気でやっているという、あれぐらいの勢いでやっていかないと変わらないな、と。こちらだけが熱くなっていて温度差が出てきちゃったら意味がないし。そういう意味でもスイッチを変えたかった。外側から名前を変えることで気持ちが変わるんだったら、と思ったからですね。

他とは違う何かを求めて...

野口 あと、Jリーグとかでも最近ゴールキーパースクールができたりとか、グローブのメーカーさんとかがタイアップしてキーパースクールができたりとかしている中で、これからそういうものがどんどん立ち上がってくると思われるわけです。

普通のところはサッカースクールから「キーパークラス」ができたという枝分かれのしかたになると思うが、ここはそうではなくて、キーパー専門のスクールだという軸がぶれていないというところ、「他とは違うよ」という風にしたいかったですね。

あとは Bande に色を付けたかったというか、これからいろんなスクールが出てくる中で、例えばキーパーグローブのメーカーがやっているキーパースクールとか、元プロが指導、と言ったら説得力があるでしょ。自分には何があるのかと考えたわけです。

「サッカーだけ」、という悲劇にはしたくないから。

野口 この Bande では、選手の将来を見据えた進路を斡旋したりとかいう、人格形成のステップアップの場として大きなものにしたい。ただサッカーを学ぶのではなく、です。

サッカーだけやっててサッカーだけしか知らないとなった時に怖いのは、あるテレビの特集でやっていたんですが、20歳の子がプロ2年目で戦力外となり、トライアウトで受からなかった時、じゃあ何をやるの？となった時に、「サッカー以外に何もやったことがない、自分に何が向いているかがわからないから不安」こう言ってたんです。

一般的なことができないという悲劇。こういう子を育てたらいけないと思う。サッカーを上手くするためには人間的にできていないと、そういうところが上手くないかな。だからそういうところを高められる Bande にしたかった。

Bande が原点と言われるような、価値のある場所に。

野口 振り返った時に、俺は Bande にいたからいろんな経験ができたとか、Bande で人間ってつながりが大事だとか、仲間ってこういうことなんだなということが解ったな、とか。何年先でもいいから振り返った時が Bande だったという場所でありたい。

そして親御さんに対して、何かここからそういう恩返しをしたいな。あそこに行かせていたことに価値があったなって思ってもらえる場所でありたい。

スキルだけじゃない、育てたいのは人間力。

野口 スキルだけ教えるなんてぶっちゃけた話、誰でもできると思う。キーパーというポジションは人間ができていないと。

人に指示して、人を奮起させたりたくさんコーチングするポジションですから、私生活はだらけてる、時間にルーズ、人にもルーズ、お金にもルーズ、約束も守らないという人間が、ピッチに出た時だけしゃべったって何の説得力もない。

ピッチに出てる時の声掛けが、あいつに言われたらしょうがない、やるしかないよな、と思えるような人間でないと。キーパーってそういうポジションだと思う。

例えば、FWなら一匹狼で、「オレが！」というのでもいいのかも知れないけれど、キーパーは調和させていかなければならないポジションで、それこそリーダーシップが求められるポジションだと思う。サッカーだけじゃない部分が実は一番大事なのかな。

試合の中で、「お前何やってんだー」みたいなことを言わなきゃならない時もあるが、そこに信頼関係が無ければただの悪口になってしまうけれど、ちゃんとコミュニケーションがとれている仲のいい奴に、ピッチの中だけは同じように厳しいことを言われても、「悪かった」と修正して、ピッチを出た時にはノーサイドで笑って過ごせるというふうに、信頼関係があるからできる。

そこを育てるためにはまずコミュニケーション能力だったり人間を育てないと。

人生の塾でありたいですね。

野口 これからの時代は、頭がいい(=勉強ができる)人間じゃなくて、賢い(人間力のある)人間にならないと。

頭がいいからいいのかというと、今の世の中、すべてが優秀な大学を出た人で回しているのかというところではないですよ。

一般のことも知らなきゃいけないし、人の心も知らなきゃいけないし、賢い人間じゃなきゃいけないのかなあ、と。

自分の経験からもそうですけど、学業だけではなく人間関係というのがあって、ご縁を頂いて、今の立場があるから。ただ頭だけよくてもどうなんだろうって。

教師もそうですよね。この人が人間的にできているから憧れるとか、言っていることが合っていたとしても、人間が嫌いだったら嫌いで終わってしまう。

そういうことを考えさせたい。考えられる選手を育てたい。

今の子どもたちは考えることが少ない、だから考える時間が必要だと思う。

——他のスクールで座学をやっているところは聞いたことがないんですが、なぜ、敢えて座学をやっているんですか？

野口 最近の子たちは練習し過ぎ。時間も長いし、9時-17時は普通だし、平日もやり過ぎじゃないか？週4日とか普通にやっている。僕たちの時代は土日のみだった。数をこなしても浅い内容で週4回だったら彼らの時間を潰しているだけ。それってどうなの？と思う。

やっぱり座学をやろうと思ったのも、体は使っているけれど頭を使っている時間が無い。「ああじゃない、こうじゃない」と現場で言われててもなぜそうなのかがわかっていない。

特にキーパーは「前でろよ！」などと指示した内容について、アフターフォローしてくれる人がいない。なんで、ああで、こうで、こうだったのか、ということ、ホワイトボードを使って一回頭で冷静に考えようよ、理解しようよ、理解できれば自分がプレーした時に考えられるよね、ということ。

ミスした時にも何であのミスをしたのか、ああだったから駄目だったんだと自分の中で解決できる、考える力を付けたかった。

常にワクワクしてほしいから。

野口 卒業していった子のお母さんも、「座学がすごく役に立ったというのを本人が言ってますよ」と言ってくれた。

コーチが思いをしゃべるから、ただの練習と違う。Jリーグ組織にいたコーチが現役の時代にもしゃべってもらっていた。熱いものが必ず伝わると思ったから。

子どもたちを常にワクワクさせていたい。Bande 出身のコーチが、ユースに上がったんだよすごいだろ、国体選ばれたんだよ、プロに登録されたんだよ、プロと一緒にやってんだよ、そのやってる人から教わってんだよ、とか。

Bande だったらいいよ、といわれるブランドに ……

——将来的にはどういう方向性を考えているのですか？ クラブチームの創設とか？

野口 いや、あくまでもキーパー専門ですね。1~2年後のことを言えば、今住んでいる川越市にはキーパーコーチがいない。

うちのところに来ると、所属チームと練習日がかぶっているから行けないんですということじゃなくて、所

属チームの監督が、Bande だったらいいよと言ってくれる、まずそこを目指しています。

「あ、あそこのキーパー専門のスクールだね。行きたいんだったらいいよ。」と言ってくれるのを目指していて、3年後には、うちに入っていることが一つのステータスになるくらい、「お前 Bande に入ってるの?」と言われるくらい。

その先、逆にキーパー界から見た時に、Bande に入るとかないとキーパーとして遅れちゃうよ。キーパーやるんだったらあそこでしょ。川越の中では「あそこで習うよね」のようなキーパーの登竜門的なポジションを目指したい。

ゆくゆくは対戦相手が Bande 出身者なら...

野口 今もなりつつあるんですが、チームで対戦する時に、Bande の選手同士が試合でお互いのチームで対戦したり、声を掛け合ったりという状況があって、子どもたちはそれが楽しいらしい。

親御さんからも、「子どもが他チームの子から声をかけられてすごくうれしくて言ってきたんです。こーやって繋がれているって Bande ならではですね」と言われました。

小学校でそれができていて、中学校に行っても近隣だから大会で同じような状況が起き、その子たちが高校に行ったら、更に地域の範囲が広がって対戦した時に、お前もそうか、お前もか、となってくると嬉しいですね。ベスト8とかになった時に、対戦相手同士で出身が Bande でした、となれば最高ですね。

そうやって初めて、僕たちのやってきたことが認められるのかなと思います。もちろん最終目標がプロというのはブレることなく、です。

うちが老舗みたいになりたい。他にもできてくるでしょうから。

Bande はどんなアカデミー?

—どんな人にこのアカデミーに入って欲しいのでしょうか?

野口 僕はこれからもこのアカデミーを、技術だけではなく、人間としての付加価値を身に付けられるような場所にしていきたいと思っています。

Bande というチームに関わることが、子どもにとってベストだと感じていただける方に是非来ていただきたいです。

それが、僕が常々選手たちに伝えている、人間性やマナーの部分だと思うんですよね。

—もう一度聞きますが、このアカデミーはどんなアカデミーですか?

長い子だと、以前勤めていたスクール時代から含めて、年中から中2まで7年育てている子がいる。

息子の悩み事などは、学校の先生よりも先に相談してくれたりしていて、彼らの人生に踏み込んでいるなと感じています。もちろんサッカーだけでなく、プライベートなことも話してくれる。そしてそういう相談にも対応しているからこそ、ファミリー的な付き合いができるアカデミーだと思います。その部分を継続するためにも、人数は僕の思いが伝わる人数でやっていきたい。

——親にできない教育こそコーチができるのでしょうか。実感します。

大人がもっと楽しまなきゃ。

——練習でゲームをやる時の野口さんは子ども相手に本気でやるそう。

小学生だからと手を抜くことはしない。普通はゴール前で子どもに渡して決めさせるというパターンが多いと思うが、野口コーチはゴールまで決めてしまって、しかも大喜び。

コーチ自らが楽しさを感じて表現するから、子どもはそれに追いつこうと目線が上がる。コーチが本気のスクールで、親御さんも見ていて面白いと感じてくれているのが分かる。

問題意識 (サッカー界の問題は社会の問題)

野口 グランドが取れないのが問題。現状、高校とかフットサル場を借りてやっている。2020年にオリンピックが決まって、それに向けてのことを言うが、実際育成するための場がない。

利益を出している団体には貸出できないといわれては、文化が広がるわけもない。

ボランティアの限界

野口 何で日本には良い指導者が育たないかというと、プロでやっていける道がないから。そんな国が世界を取れるはずがない。

もちろんすべてのボランティアスタッフの方というわけではなく、実際にある一部のボランティアスタッフの方になると思うのですが、「やってやっている」感のボランティアスタッフのレベルでは、そのボランティアレベルでの選手しか育たないと思います。そういう指導者から指導を受けた子どもはかわいそうでたまらない。

そんな指導では、子ども達のサッカー人生という未来を潰してしまうことになるのではないだろうか。。

★ライターの所感★

これからの時代は、心の時代であり、人間力の時代であると思う。

野口さんの、「キーパーとは、人間力そのもの」という言葉の通り、キーパー専門のアカデミーでありながら、「人間力創造塾」とでも名付けたくなる、熱いアカデミーである。このアカデミーは、小学生のチームによくありがちな練習がダラダラとか、大人が怒ってばかりいるという、今の少年世代の「育成の歪

み」の受け皿にもなっていくと思う。そして、こんなコーチ陣に教わることのできる子どもたちは本当に幸せだ。

このBande から代表キーパーを輩出する日もそう遠くはないだろう。

そういう意味でも、今後の動向には目が離せない。

Bande GK Academy 専属ライター 磯部敦史